【短報】

# 「お茶っこ」に関する一考察
## －岩手県陸前高田市の訪問から－

倉光　ミナ子

### Ⅰ　はじめに

2011年３月11日の東日本大震災は岩手県陸前高田市（以下，陸前高田と略す）に津波による甚大な被害をもたらした．お茶の水女子大学文教育学部グローバル文化学環の熊谷圭知教授は陸前高田が自身の父の故郷であるという縁にも基づき，震災直後から学生たちを連れて陸前高田への訪問を続けている．筆者も2017年８月に熊谷教授の実習に同行するかたちで初めて陸前高田を訪問する機会を得た．そして，その後，熊谷教授を研究代表者として立ち上がった共同研究（日本学術振興会科学研究費・基盤研究(Ｂ)「被災地」陸前高田の場所再構築と地理学－感情・身体・ジェンダーと風土の視点から）に研究分担者として関わっている．この研究では，各研究分担者が陸前高田で暮らす研究協力者を選定し，彼／彼女らとの連携の上で,ライフストーリーの聞取りを通じて,場所喪失の現実と復興過程の課題を考察していくことが求められている．しかし，個人的に自らの海外研究において,ライフストーリー研究の難しさを実感しつつあり,年によくても２回ぐらいしか訪問できない陸前高田においてどのように調査を進めればよいのか，試行錯誤を続けている．

そのような状況において，2019年６月，陸前高田訪問３回目にして,「お茶っこ」という言葉とその行為に関心を抱くようになった．きっかけは陸前高田に嫁いできてから25年暮らしているというフィリピン人女性と調査の打合せをしていたときの何気ない会話にある．筆者が陸前高田の暮らしやすさについて聞くと，その一つの事例として，震災前には「近くのおばあちゃんとかが畑から顔を出して,『〇〇ちゃん，元気？』とか声をかけてくれる．野菜を分けてくれる．外人としての扱いはされずに日本人として扱ってくれたから．自分も日本人のようにふるまおうと．よく**お茶っこ**（筆者強調）を近所のおばあさんたちとうちの縁側でして，代わりに野菜をもらうという付き合い方があった」と語ってくれた．このように震災前の日常生活を何気なく語ってくれた中に，また外国人（というこの括りはよくないと分かりつつも）の口から出てきたため，突然「お茶っこ」という言葉に興味を抱いた．そして同訪問時に，災害復興公営住宅で暮らす80代の日本人女性を訪ねたが，彼女も「さっきまで〇〇さんとお茶っこしてた」とか，帰ろうとする筆者たちに「本当にお茶っこしていかねえのか」といったので,「お茶っこ」はかなり陸前高田の日常生活の一部なんだろうなと考えるようになった．実は，それまでもグローバル文化学環の実習の様子の一つとして，仮設住宅の集会所で，お茶大生（お茶の水女子大学学生の略）が行くと，よく「お茶っこ」を催して人々から話を聞いたというのを聞いていた．しかし，筆者自身は「お茶大の娘と,『お茶をする』をかけて,『お茶っこ』ってうまいネーミングだな」と思っており，恥ずかしながら，よもやそれがこちらの日常生活の一部であるとはこのときまで理解していなかったのである．

本稿は，この「お茶っこ」というものについて，先行研究と２回の現地訪問で得られた少ない知見を簡単にまとめ，報告することを目的としたい．

### Ⅱ　「お茶っこ」とは何か

そもそも「お茶っこ」とは何なのか．もともと東北地方でみられる独自の風習／文化であるならば，すでに何らかの研究がなされているのではないかとGoogleとCiNiiで調べてみた．Googleに「お茶っこ」で検索をかけると,『和樂：日本文化の入りロマガジン』というWebサイトに「『お茶っこ』ってなんだ？ 福島・会津には独特のお茶時間が流れていた！」という記事（2019年8月25日）を見つけた．そこには「お茶っこ」について次のような説明があった（和樂編集部 2019）．

> 東北地方には「お茶っこ」という文化があります．それは「ちょっとお茶でも」と，近所の親しい人が集まって，話に花を咲かせること．ここ会津でも「お茶飲みして回る」という言い回しがあるそうで，誰々のお家に遊びに行く，という意味．

CiNiiでは「お茶っこ」のそのものについて論じた先行研

究は見当たらなかったが，本文中に「お茶飲み」や「お茶っこ」が出てくる先行研究を数本見つけることができた．その一つである孫ほか（2015：125-126）は「『お茶っこ』というのは，近所の方々と漬け物や煎餅でお茶を飲みながらおしゃべりを楽しむという東北地方の文化」と記しており，齋藤ほか（2005：42）は「高齢者間の社会交流の１つとして，東北地方の農・漁村地域を中心に『お茶飲み』と称した自然発生的な習慣がある」と説明している．特に，齋藤ほか（2005）の論文には彼女たちが調査した2000年当時のある東北地方の「お茶飲み」の様子が次のように詳しく記されていた．

> 「お茶飲み」は，友人や隣人の家に複数で集まり，ごはんやおかずといった食事的な物と緑茶を中心とした飲み物，果物，菓子などの食べ物を囲みながら，健康や料理，家族についてなど身近な話をして交流を図り，約２時間から半日過ごしている．「お茶飲み」の参加者は，高齢者が中心で年齢が若くなるに従い減る傾向にある．「お茶飲み」の始まり方は，「常に日程や会場が決まっている」「そのつどメンバー間で調整する」「自然にメンバーが家に集まり，集まれば即，実施となる」「趣味の活動を利用して行う」など多様である．実施頻度は月数回から毎日とさまざまであるが，農業を営む者の多くは，農繁期（春から秋）に実施頻度や時間が減少する．参加者にとっては，「楽しみ」「ストレス発散」「気分転換」「生活のはり」「相談の場」「気軽に気兼ねせず話せる場」「情報交換の場」となっており，「お茶飲み」を通して人間関係により，日常的に心身ともに助けられる者や友達の輪が広がるという者もいる（齋藤ほか 2005：42）．

このように，東北地方の一部には独自の習慣や文化が見られることが分かるが，齋藤ほか（2005：42）は「お茶飲み」に関する研究はほとんどないと記している．しかし，彼女たちによれば，2000年代より，東北のいくつかの市町村はこうした習慣をすでに高齢者のための健康づくり事業に組み込んできた．「お茶飲み」と高齢者の精神面・社会面の影響の関係について量的調査を行った結果，「お茶飲み」における交流の特徴は，問題解決思考を持たず，ともに余暇を過ごしたり，何気ない会話を楽しんだりするような相互作用にあり，それが人との交流や関係性に対する満足感を高めるものとなっているという．そして，こうした「お茶飲み」を活用することは，高齢者の日常的なストレスや孤独感，社会的孤立感を緩和し，社会とのつながりを支える役割があると指摘されている（齋藤ほか 2005）．

そのような東北地方独自の習慣や文化を意識して活用したのかどうかは定かでないところもある[1)]が，「お茶っこ」は東日本大震災後のさまざまな支援活動の報告や研究に記されている．そこでは，震災直後の2011年夏の支援活動において，早くも仮設住宅の集会所や談話室等で「お茶っこサロン」とか「コミュニティカフェ」という場が出現したことが報告されている．たとえば，2011年７～９月にかけて，いわてGINGA-NETの主催で行われた大学生のボランティア活動の報告では，岩手県大槌町，釜石市，大船渡市，陸前高田市，住田町の活動において，仮設住宅の近くにある談話室等で，「お茶っこサロン」が開催されている（藤本 2011：96-98）．また，孫ほか（2015：126）は2011年８月から2012年４月まで，宮城県東松島市，石巻市，気仙沼市の複数の仮設住宅において，「お茶っこ」をヒントに，「仮設住宅の集会場にてお茶やハーブティー・コーヒーなどを飲んでもらいながら，血圧相談や健康問題の相談・傾聴などを行った」と報告している．岩手県の内陸市であった盛岡市，北上市，花巻市，遠野市，奥州市においても，みなし仮設等で生活する沿岸部からの避難者たちが集い交流する場として，2011～2012年ごろに「お茶会などの交流会」が行われたことが報告されている（冨安・狩野 2016）．2015年以降，仮設住宅から災害公営住宅・自立再建等に向かう移行期において，岩手県の釜石市や大槌町で，自治体の自立・被災者支援の一部として，災害公営住宅等でコミュニティカフェや「お茶っこ」サロンが行われるようになったことが記録されている（児玉・小木曽 2017）．

このように，東日本大震災後に被災地各地で，支援の一環として，次々と「お茶っこ」が開催されていたことがよく分かるが，その目的は被災地のゆっくりとした復興の過程において少しずつ役割を変えていったように思われる．たとえば，被災直後の仮設住宅における「お茶っこサロン」について，藤井（2011：96，98）は「別々の集落から避難し身を寄せた仮設住宅で，住民間の新しい近所づきあいを築くお手伝いをすること」が目的であったと述べ，その当時は住民たちが仮設住宅における人との交流の難しさを感じている様子を記している．また，内陸のみなし仮設等における沿岸部からの避難者たちの交流の場について，冨安・狩野（2016：385）はその利用者がほとんど高齢者であることを指摘した上で，そこが新たな友人をつくったり交流を楽しんだり，高齢者の外出のきっかけとなるような意義があることを論じている．このように，「人が集まること」そして「お茶を介して交流を図ること」といった基本条件は齋藤ほか（2005）の

研究時の「お茶飲み」と変わらないが，震災直後の仮設住宅等で開かれた初期の「お茶っこ」はつねに支援の一部として，「気軽に立ち寄れる」「ボランティアや支援の人に相談ができる」「よく知らない住民同士の交流を図り，人間関係を構築する」といったさまざまな支援目的のアジェンダが付随していたことがよく分かる．

## Ⅲ　陸前高田で語られた「お茶っこ」のあり様

さて，「お茶っこ」が陸前高田の日常生活の一部であると分かってから，筆者の関心は大きく次の２点に絞られていった．①「お茶っこ」とは，震災前はどのような空間で行われており，どのような場所であったのか．フィリピン人女性の語りでは「縁側で」とあったが，こちらの家の構造として「お茶っこ」がしやすいつくりがあったのだろうか．また，どのような人たちが「お茶っこ」で何を語りあっていたのだろうか．そして，②その「お茶っこ」は震災を経て，どのように変化したのか．

2019年10月，陸前高田訪問４回目において，筆者も含めた３名の研究分担者で，二つの災害復興公営住宅を訪問し，それぞれのテーマで話をうかがった．筆者は早速これらの問いを考えるべく，会うことのできた方たちに話の途中に挟むかたちで「お茶っこ」について尋ねてみた[2)]．最初の災害復興公営住宅Ａでは，高齢の男性１名と女性２名から話を聞くことができた．そこにおいて「お茶っこ」について分かったことの一つは，それがもともと女性の習慣／文化であったらしいということである．よく熊谷教授から実習時の状況として，「仮設でお茶っこをしても，男の人は出てこない．お酒を持っていくとやっと重い口を開いてくれる」と聞いていたので，「男の人はなぜお茶っこに出てこないのか」と尋ねてみた．すると，女性の一人が一言，「男の人ははまんない／はめない」と答えた．この「はまらない」という表現がよく分からなかったのでさらに尋ねてみると，もともと「お茶っこ」は女性たちがするもので，男性は「飲み会にいく」ものだったという[3)]．彼女たちいわく「男の人はお茶っこで話が合わないから，遠慮する」．要するに，「お茶っこ」はどちらかというと女性たちの習慣／文化で，男の人にはもともとそういう習慣がなかったことがうかがわれた．参加していた一人の女性は「男の人は人の話をしないから」，自分はむしろ男の人との「お茶っこ」を楽しむことができると語っていたが，ここには，おそらく，女の人には慣れっこで会話が弾む「お茶っこ」も男性には不慣れな習慣で，男の人が世間話に花をさかせるようなことがない様子があることもうかがわれる．また，女性３名の研究分担者で訪問すると先方側に伝えたところ，先方

**写真１　「お茶っこ」でふるまわれる手作りの漬物**
（2019年10月　災害復興公営住宅Ｂにて筆者撮影）

が参加者を募ってみたら，ある男性は「熊谷先生がこないならくんねえ」というふうに，女性たちの「お茶っこ」には男性が集まりにくいというのもうかがわれた．

災害復興公営住宅Ａの訪問で，もう一つ分かったことは，男性と女性が一緒に「お茶っこ」をしていると「別の目でみられる」可能性があるということだ．想像するに，公営住宅で独り暮らしをしている女性が同じように独り暮らしをしている男性に積極的に「お茶っこ」を誘うと，「妄想を語る人がいる」という．そのようなことを反映してか，「お茶っこ」は「個人の家で飲むより，集会所で飲んだ方がいい」という話も出た．

次に訪問した災害復興公営住宅Ｂの１階には，平日の月曜日から金曜日の間，自由に出入りできる交流スペースがあり，60～75歳の５～６名が果物や漬物を持って集まっていた．ここにおいても会話の中で，「お茶っこ」は「個人の家でやると，気を遣ったり迷惑をかける」「男の人がお茶飲みに集まるところは少ないが，ここは珍しく結構集まる」といったことが語られた．

ここの会話において示唆されたことは，仮設住宅での経験がおそらくそれまでの「お茶っこ」のあり様をいろいろな意味で変容させたのではないかということだ．たとえば，ここに参加していた一人の女性は新しい自宅を建て，この公営住宅には住んでいないが「お茶っこ」のためにわざわざやってくるという．彼女いわく，「仮設にいたときの人は仲がいい．何十年隣組でいた人より結束が固い．仮設は毎日『一緒に助かったね』と，意気込みが違った．グループができすぎていた」．要するに，仮設住宅で苦楽をともにした仲間とやってきた「お茶っこ」は仮設がなくなったからといってすぐに解散されるものでもなく，いろいろな事情にて運よく機会を得た人たちはそのまま「お茶っこ」仲間として続いているのであろう．その意味において，この交流スペースは誰でも気軽

に参加することができるが，おのずと「集まるメンバーはある程度決まっている」という．

また，「お茶っこ」への「男性の参加」も二つの意味で「お茶っこ」の変容を示しているのかもしれない．この交流スペースにおける「お茶っこ」では常連の２名は男性であり，男性が珍しく集まる「お茶っこ」であると称されていた．もし「お茶っこ」が女性の場所であったのであれば，仮設住宅での生活あるいは震災の経験は「お茶っこ」を男性も参加できる場へと変えた可能性がある．さらにいえば，「お茶っこ」に付随する会話を楽しむという行為自体の意義も，もしかしたら単なる楽しい日常生活の一部から，癒しや忘却をもたらす行為に変わったのかもしれない．実際に，この男性二人は非常に明るく会話を楽しんでおり，筆者たちも含めて冗談が飛び出したりしていたが，筆者の隣に座った女性が二人に聞こえないようにそっと，「ああ見えてもね，お二人とも震災で奥様を亡くされているのよ」と教えてくださったのが印象に残った．とすれば，常連として「お茶っこ」に参加する男性たちにはそれなりの背景があるのかもしれない．

## Ⅳ　今後の課題ー「お茶っこ」の変容，それとも発展？

以上，先行研究と陸前高田への訪問を通して，東北地方には「お茶っこ」という独自の習慣／文化があること，そして，どうもそれが震災直後から支援活動の一部に組み込まれてきたことが明らかになった．ここにおいて，震災の経験を経て，「お茶っこ」は微妙に変化したのではないかと推測している．第一に，「お茶っこ」はもともと近所の人や友人が集まる場であったが，震災後は特に仮設住宅という空間において，新たな人間関係を構築したり，それを維持したりする場になっていったといえるのではないだろうか．そして，その人間関係には，冨安・狩野（2016）が「避難者だけのための場にとどまらず，復興に関わる人々が集う場」と指摘しているように，地元の人たち以外の外部者も大いに含まれていったと考えられる．

第二に，「お茶っこ」は単なる日常生活の一部としての交流の場から，積極的な支援の場へと変容した可能性が高い．すでに指摘したように，震災直後の仮設住宅等で開かれた初期の「お茶っこ」は「気軽に立ち寄れる」「ボランティアや支援の人に相談ができる」「よく知らない住民同士の交流を図り，人間関係を構築する」といったような目的を持つ支援の場でもあった．これに関して，たとえば小山・河合（2015: 6）は宮城県南三陸町の支援活動に関する考察で，「この地域にはセラピー文化はなく，心のケアを受ける精神的な風土がない」と指摘している．この指摘が東北地方にある程度広く合致しているのであれば，もしかしたら「お茶っこ」という空間は単なるコミュニケーションの場から，悲しみを共有する，あるいは癒す効果をもたらすような場として新たな役割を得たのかもしれない．

ただし，震災後の「お茶っこ」にみられる変容を以前の「お茶っこ」が発展したものとして捉えられるのかという点についてはさらなる検討が必要である．震災前の「お茶っこ」は自然発生的な文化／習慣であったが，震災後の報告には継続の難しさ（児玉・小木曽 2017: 131）が指摘されている．実際に，陸前高田の訪問先の公営住宅でも「お茶っこ飲むべし（もっとお茶っこをしよう）」とか，交流スペースがあっても「集まるメンバーはある程度決まっていて…もっと出てくればいいのにね」という声が聞かれた．濃い人間関係があった仮設住宅を離れた後の「お茶っこ」は一つには開く場所の確保が難しいこと，もう一つは確保できた空間が物理的なオープンスペースではないことで人が集いにくいのかもしれない．また，「お茶っこ」には人間関係が付随する．当たり前であるが，「気が合う」とか「何かを語られそうな人には話さない」という語りからもほのめかされるように，ある程度の信頼関係ができないと「お茶っこ」は成立しないようだ．このように考えると，仮設住宅での経験を経て，ある程度「お茶っこ」するメンバーは固定化されてしまっているのかもしれない．

その一方で，震災直後の報告では交流の場としての「お茶っこ」が近所のお茶飲みとは異なり良い距離感を生んでいるので好まれていること（冨安・狩野 2016: 385）や，住民有志によって「地域のつながりのある生活機会の創出」の場として続けられていく様子（児玉・小木曽 2017: 133）が報告されているので，今後も「お茶っこ」が意義のある空間として見直され，根付いていく可能性は高い．しかし，「お茶っこ」をめぐる感情の地理学についてはさらなる考察が必要である．また，「お茶っこ」のような空間をつくるという動きが，東北の被災地にのみ，意図してつくられてきたのかについては今後さらに検討したい．

謝辞　岩手県陸前高田市でお話を共有させてくださった皆様に深く御礼申し上げます．本研究はJSPS科研費 JP18H00770の助成を受けたものです．

## 注

1）今回の文献調査において，はっきりと「お茶っこ」の習慣・文化を被災者の支援活動に取り入れたと明示しているのは孫

ほかの研究（2015）だけである．

2) これらの会話はすべてインフォーマルなインタビューであったため，正確に逐語録されたものではない．

3) ただし，これはあくまで一般論で，このとき同席していた男性は「(おれは)あまり飲まないから(飲み会には)いかない」といっていた．

## 文献


児玉善郎・小木曽早苗 2017. 東日本大震災被災地の災害公営住宅における住民支え合いの取り組みと今後の課題. 都市住宅学 99: 128-133.

小山　望・河合高鋭 2015. 南三陸町への支援活動に関する考察－分断と格差について. 埼玉学園大学心理臨床研究 1: 1-13.

齋藤美華・小林淳子・服部ユカリ 2005. 前期高齢者の「お茶飲み」がソーシャル・サポートと主観的幸福感および交流の充実感に及ぼす影響. 日本地域看護学会会誌 7(2): 41-47.

孫　大輔・朝見大紀・穂積　桜・林健太郎 2015. プライマリ・ケア多職種による仮設住宅被災者に対する健康相談・心のケアプロジェクト「健康カフェ」. 日本プライマリ・ケア連合学会誌 38: 125-127.

冨安亮輔・狩野　徹 2016. 内陸避難者が集う場に関する研究－東日本大震災における岩手県の事例考察. 日本建築学会技術報告集 22-50: 381-386.

藤本美雪 2011. いわてGINGA-NETプロジェクトに引率教員として参加して. 青森県立保健大学雑誌 12: 95-98.

和樂編集部 2019.「お茶っこ」ってなんだ？ 福島・会津には独特のお茶時間が流れていた！ https://intojapanwaraku.com/travel/4443/（最終閲覧日：2020年１月18日）



**くらみつ・みなこ**

**お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系**


# Brief Consideration of "*Ochakko*": A Case of Rikuzentakata-city


KURAMITSU Minako (Ochanomizu University)